

鴻 koh

月刊俳句誌

令和2年8月1日発行  
(毎月1回1日発行)  
第15巻第8号 通巻170号

8 月号

2020



まひまひつぶり雨の一日の九段坂

新緑の中の桜の幹の瘤

文字摺草呟くやうな雨の来る

鴨しきり江戸城北の丸の夏

とつとつと雨ほつほつと山法師

かいつぶり潜きては梅雨深めけり

缶を切る音が水無月の音となる

大注連の横一文字走り梅雨

ほうたるにぬばたまの闇忌を修す

蛇衣を脱ぐころ雨の上がるころ

茄子焼いて遠流のごとき日を過ごす

端居して太宰治の忌の夕べ

父の日を夜のブランコに歩み寄る

# 遠流のごとく

主宰作品

増成栗人

# 「鴻」の歳時記（夏編）

抽出 佐久間敏高

夏

手を浸けて水の勢ひに触るる夏

田中一光

夏

ジャンプ台眼下に万華鏡の夏

西野桂子

麦の秋

貼り合はす郵便書簡麦の秋

横井遥

麦の秋

レイングッズ買ひに行かねば麦の秋

佐藤慧美子

夏至

藍色のマニキュアをして夏至の夜

花本智美

晩夏

晩夏光百選の水掬ふとき

安食哲朗

水無月

妻いづこ青水無月の川明り

増成栗人

熱帯夜

チェーホフを書架より抜きし熱帯夜

横山光榮

土用

土用太郎眠りの中の波の音

石田蓉子

極暑

ならぬ事はならぬ会津の酷暑かな

山口民子

炎暑

一句だに出来ず炎暑の中にある

齋藤 公

夏の果

夏果てるらし滑らかなボールペン

後藤秋沙

夏の果

逝く夏の柱にありし疵いくつ

荒井一代

夏の月

蛸壺に月の涼しくあそびをり

吉田鴻司

夏の霧

夏霧の近づいて牛匂ひけり

後藤兼志

夏の霧

女四人来て隠り沼の夏の霧

坂入喜代枝

虹

めぐり来し娘の忌よ虹の立つ日なり

和田遊

雷

寺町を切り絵のごとはたた神

藤原明美

夕焼

連弾の最後の和音夕焼す

谷口摩耶

夕焼

大夕焼父の背中で見し記憶

山岸明子

滝

音立てて落つ一瀑の風の息

荒川心星

夏休み

夏休み足し算の子に指を貸す

中川幸恵

帰省

帰省子の筏づくりの樹を選ぶ

鈴木隆一郎

氷水

ちりちりと水になりゆくかき氷

森 睡花

夏蒲団

頸までを埋めあげがたの夏蒲団

中島源兆

扇

能管の響きて扇子はたと止む

小澤 冗

打水

水打つやなほ傾ぐ日の衰へず

半谷 洋子

桜桃忌

真つ白な皿を並べて太宰の忌

岩佐 梢

茅舎忌

茅舎忌の橋の真中にゐて涼し

松川 苗

河鹿

河鹿鳴きをり南朝の山の裾

松田那羅生

青葉木菟

青葉木菟宿坊の玻璃磨かれて

佐野久乃

鮎

初物の鮎のほどよき塩加減

草柳 忍

熱帯魚

熱帯の色を極めて熱帯魚

中村世都

飛魚

あご飛んで五島は隠れ耶蘇の島

藤原 翔

鳳蝶

妻の忌や近づいて来し揚羽蝶

平野鉄哉

蟬

蟬の木となり白樺のふくらめる

森多 歩

蟬

蟬しぐれゆるゆる登る南部坂

河合公八郎

百日紅

枝ごとに揺るる百日紅の花

本田豊明

夾竹桃

夾竹桃日は衰へること知らず

中西富士子

マロニエの花

籠り居に倦みマロニエの花明り

飯川久子

青梅

五風十雨梅の実色を得つつあり

相川健

緑蔭

緑蔭に入りて大きな息をつく

北川博司

常磐木落葉

夏落葉輪廻転生てふ言葉

杉崎妙子

甜瓜

恙なし厨に真桑瓜ふたつ

吉野あさ

蓮

縄文の気を吐き出せる古代蓮

原光生

草いきれ

草いきれして立穴の住居跡

岡杜詩

蕺菜

仄明りして十葉の花の雨

山内宏子

蕺菜

月まろしどくだみの花青き夜は

岩崎俊

振花

振花のいっぽん筋を通しけり

畑田久美子

蓴菜

蓴菜のつるんと雨に煙る宿

鈴木崇

# 詩 作品抄

蜘蛛の子の飛ぶやはらかき風に飛ぶ 森 祐司

人恋ふや草かげろふを草蔭に 水沢和世

手作りのフルーツサンド花は葉に 鈴木 崇

熊除けの狼煙のあがる蔵山 田部富仁子

潮騒を聞く麦秋の丘に来て 藤原明美

丈伸ばす深山芋環風の音 佐藤あさ子

愛鳥週間トランペットの音の響く 林 未生

鶯や富士を遙かに蘆花旧居 河合公八郎

やんばるのおばあのはなし若葉風 野村昌代

子育ての椋の巣箱に日の当る 西條弘子

緑蔭に養蜂箱が五つほど 駒井ちえ子

病室の版画の百合の涼しさよ 深川峰子

日雀山雀仏師に樟の匂ひせり 山崎正子

散策によきマロニエの花の道 田邑利宏

ガス入りの水買うてゐる夕薄暑 三代川朋子

立葵すくすく書肆の門口に 石垣真理子

小平の緑雨に墓の匂ひけり 足立枝里

柿若葉断捨離にまだ踏み切れぬ 伊藤真代

ユトリロの白の時代よ春の雨 森川恵子

五月五日新聞で折る紙兜 遠藤 泉

増成栗人 選



# 楽庵閑話 26

虫丸



季語の本意  
本情を大切  
にした使い  
方をすべき  
だと言われ  
たのですが

本意・本情は  
和歌から俳諧に  
至る季節の情趣  
を規定  
するも  
のでは  
あるが



兼好法師が「徒然草」で  
「花は盛りに  
月は隈なきを  
のみ見るもの  
かは」と

俳句が生まれる前から  
類型に陥りやすい  
危つさを指摘  
してもいる

それほどに  
囚われなく  
てもいいが



かと言って 季語を  
添え物と  
しか使え  
ない安易  
な句では  
どうしようもない

安易に流れず  
本意を超える  
使い方を  
考えるん  
だね

季語の  
使い方が  
!



あらじ  
どうした  
の?

ホ  
ホ  
ホ

<http://www.haisi.com/koh/index.htm>

俳誌のサロン



# 羽音集

増成栗人 選



さくら葉となり梢越しの星の数  
潮騒を聞く麦秋の丘に来て  
用もなく茅花流しの川へゆく  
籠り居を癒やす八十八夜摘  
闇深くありどくだみの花の白  
筍を小分けにしてのお裾分  
桜蕊降る藁葺の小舎に降る  
聖五月柿渋染めのマスクして  
あたらしき靴とリュックに替へて夏  
山独活の一株残る捨て畑  
桃色の淡きがよろし花水木  
空へ届け父と子が揚ぐ鯉幟  
柏餅幼きころの日の記憶  
五月五日新聞で折る紙兜  
薫風と木洩れ日の中歩きけり  
つばくらめローカル線の時刻表  
しやぼん玉飛ばせ明るき青空へ  
病葉にまだ生氣あり雨しとど  
マロニエ通りゆく貴婦人の夏帽子  
芍薬のただひとときの雅かな

船橋 藤原明美

土浦 小林和子

大阪 遠藤 泉

俳誌のサロン

流山 中内敏夫